

磯良の変質

——「吉備津の釜」における一つの悲劇——

中尾美香

はじめに

『雨月物語』は、上田秋成が「剪枝啗人」の戲号を用いて、安永五年（一七七六）に著した全五卷九編の怪異小説集である。それらは、日本古典作品や、中国白話小説を典拠として編まれたことが広く知られているが、ただの翻案小説にとどまらず、その優れた描写によって初期読本としての確固たる地位を築いている。

その九編の話の中から、卷之三に収められている「吉備津の釜」をとりあげたい。

「吉備津の釜」は、夫・正太郎に裏切られた女性磯良が「鬼化」となり、夫に復讐を遂げるまでを描いた作品で、「怪異の点では、日本文学の白眉ともすべき一篇」と評されているが（注1）、怪異表現のみに重きを置いているのではない。そこに人間の持つ「性」が鋭く描かれているからこそ、恐ろしさがより際立つのだといえよう。

ここでは、その恐怖をつくりだした磯良について考えようと思う。磯良は、夫にあれだけ尽くしたにもかかわらず裏切られ、「鬼化」になってしまった悲劇の女性（注2）と考えられているが、果たしてそれだけの意味での悲劇であるのだろうか。生前は完璧なまでに貞婦であった磯良が、何故袖・正太郎を殺す凄惨な「鬼化」になったのかを中心に、磯良の持つ悲劇の意味について論じていくことにする。なおテキストは、講談社学術文庫「雨月物語」上下巻（青木正次氏全訳注 昭56・6）を使用する。

第一章 磯良と正太郎

第一節 貞婦磯良とその影

磯良は、嫁探しをしていた井沢家に「……うまれたち秀麗にて、父母にもよく仕へ、かつ歌をよみ、箏に工みなり。従来かの家は吉備の鴨別が裔にて家系も正しければ……」と、申し分のない女性として紹介されている。

その紹介の通り、磯良は模範的なよく出来た嫁として舅・

姑を満足させ、正太郎も落ち着いたかに見えた。その模範的な姿は、正太郎が遊女の袖と付き合うようになっても変わらない。正太郎が妾宅から戻らなくなると親の怒りについて諫めたり浮ついた心を嘆いたりはしているが、それ以上責めることはなく、それどころか磯良の「切なる行止」（おとまり）を見ていられなくなった舅が正太郎を二室に閉じ込めると、悲しがつてますます真心を込めて正太郎に仕え、袖にも物を送って暮らしを助けるといふ行動に出ている。正太郎の行為は、夫としても井沢家の跡継ぎとしても相応しいものではないが、磯良は嫁の鏡としての態度を崩さない。嫉妬は悪徳とされた封建社会では理想的な姿であろうが、彼女の「自我」は全くと言つていいほど見えてこない。「封建的な得目を形どつた規範の人形のような印象しか与えられていない」（注3） 磯良は、道徳や規範の中に存在しているのだ。しかも彼女自身が見えないといふことは、それらに抑圧されていることを知らないのである。道徳的に生きるのが悪いとはいえないが、磯良の「自我」がその中に埋まりきっていることは危険なことでもあるといえよう。

その危険を仄めかす科白がある。「…我が兎も目をかぞえて待ちわぶる者を、今のよからぬ言を聞くものならば、不慮なる事をや仕出さん」といふ磯良の母の科白だが、こ

れは、御釜祓の凶兆を無視して縁談を進めようと夫を説得する場面でのもので、磯良が思い詰めたら何をするか分らない性分であることを、縁談をこのまま進める理由に挙げている。この性質が、磯良自身や正太郎との結婚生活に影を落としていることはいうまでもない。磯良は模範的な女性だが、それは彼女の「自我」ではないために、常に自己抑圧の影がつきまといっているのである。

磯良は、封建社会の道徳や規範のままに生きていて、自分自身を殺していることに気がついてはいないが、思い詰めたらいつそれが爆発してもおかしくないといふ、影の部分を持つ人物として描かれているのだ。

第二節 「奸たる性」の正太郎

非常に模範的ではあるが、思い詰めたら何をしだすか分からない磯良に対し、「奸たる性」の正太郎は、どういふ人物として描かれているのだろうか（注4）。

正太郎は、「…農業を厭ふあまりに、酒に乱れ色に耽りて、父が掟を守らず…」「されどおのがまゝの奸たる性はいかにせん」と述べられているように、どうしようもない放蕩息子として描かれている。井沢家の跡取りであるにもかかわらず、自分の好き勝手に生きてそれを改めようとしていないために、両親が落ち着かせようと縁談を用意するので

ある。

磯良が嫁いだ当初こそ、両親の期待通りに落ち着きを見せた正太郎だが、それも長くは続かなかつた。正太郎が妾宅を構え、井沢の家に戻らなくなったのだ。結婚した直後は、磯良を「…其の志に愛てむつまじくかたらひける」という風であったのが、「奸たる性」にまかせてしまう結婚前の姿に戻ってしまったかのようである。妾宅に入り浸っているということは、当然家業も放ったままであろう。物事に腰を据えてあたることの出来ない正太郎の一面を、如実に表しているといえる。

だが、正太郎は本当に結婚前の、好き勝手に生きる姿に戻ってしまったといえるのだろうか。確かに、「妓女」の袖と親しくなり家に寄り付かなくなってしまったことだけを考えるとそういえるが、そうとばかりは思えない面もある。

父親によって一室に閉じ込められた後、磯良に言った「…(袖は)親もなき身の浅ましくてあるを、いとかなしく思ひて憐をもかけつるなり。我に捨られなば、はた船泊りの妓女となるべし。おなじ浅ましき奴なりとも、京は人の情けもありと聞ば、渠をば京に送りやりて、栄ある人に仕へさせたく思うなり」という、袖を思いやるこの言葉は、偽りではなく正太郎の本心であろう。とすると、正太郎が

袖と親しくなり身請けまでしたのは「奸たる性」にまかせた単なる気まぐれではなく、優しい一面の表れだと考えられるのだ。

しかしこの優しさが弱さと表裏をなすものだったため、磯良をだまし改心したかに見せて金銭を用意させ駆け落ちするという、「犯罪的とも云える裏切り」(注5)を働くことになるのである。この行為は元を正せば、正太郎の優しさに起因するものだが、許されるものではない。だが、正太郎本人に裏切りの意識は稀薄だったのではないか。でなければ、正太郎からは詐欺師的な印象を受けてもよいが、そういった印象は全くないのだ。模範的な態度で自分に尽くす磯良に答えようとは思わず、袖を思いやる気持ちの方が強かったがために裏切る結果になってしまった、と考えられるのである。

正太郎は、「奸たる性」の言葉の通り道徳や規範に縛りつけられていない人物であるし、道徳や規範を疎ましく思っているようだが、それだけで悪人とは決めつけられない。正太郎には優しい面があり、その優しきや人の良さが彼の行動を決めているといえる(注6)。

そういった意味では、道徳や規範が行動を決める磯良とは正反対である。その正反対の「性」を持つ二人は、親同士が決めた結婚とはいえ、まがりなりにも夫婦である。二

人を夫婦として見た場合、どのような関係が見えてくるのだろうか。

第三節 不幸な結婚

磯良と正太郎の結婚は、最初は当人たちの知らないところで計画されているため、結婚する当人たちの意思は介していない。家と家との結び付きが重視されていた封建制の下では仕方のないことだろうが、これが不幸の始まりだったことは事実である。それに加えて、御釜祓で示された凶兆も無視されている（注7）。磯良を早く嫁がせたいからとはいえ、それが無視してもよい理由にはならないだろう。

このように、両家とも家の事情を重視しての結婚である。結婚に対して当人たちの積極的な意思がない以上、初めから何かしら不吉なものがあったのだ。その上、先に見たように、磯良と正太郎は合わせ鏡のように正反対の存在である。磯良が、自分自身を端から見ず悲痛と思えるまで抑えてあくまで模範的な行動をするのに対し、正太郎は道徳や規範を気にしないため、それらを行動の基準にはしていない。また、磯良は物事を一途に思い詰めやすい人物だが、正太郎はあまり物事に頓着しない人物である。二人とも全く別の「性」を持っているのだ。このような二人が、うまくいく道理がない。

それでも結婚してすぐは、結婚を楽しみにし嫁の心得も十二分に持ち合わせている磯良が、「夫が性をはかりて」仕え、また正太郎の方も磯良の意志に感心して彼女を可愛がっていた。しかし、正太郎は磯良の意志に感心して彼女を可愛がっていただけであり、そういう気持ちのみの夫婦関係が、長続きはしないだろう。磯良の方にも、正太郎が夫である以上、正太郎だけに誠心誠意仕える気持ちはあっただろうが、それは「嫁」だからであり、例えば、彼女の夫が正太郎ではなかったとしても、同じ様に真心を込めて相手に仕えたと考えられるのだ。

正太郎のような「奸たる性」を持っていない人物であれば、磯良のそのような面を「得目」と見て、いつまでも可愛がれたかもしれないが、正太郎は、道徳や規範に押し込められて自分自身を表に出そうとしない磯良が、息苦しく思えてきたのではないだろうか。だがその不満を磯良に直接見せることが出来ずに袖と親しくなったのだろう。そうなっても、磯良は「嫁の鏡」の態度を崩さずに正太郎に接し続け、そうすることでますます正太郎を袖の側に走らせたといえる。つまり、磯良が規範的であればあるほど、正太郎は圧迫感を感じて磯良から逃げ、袖の方へと傾いていったのである。磯良は正太郎の性質を弁えて仕えていたはずだが、やはりそれは嫁の心得の範囲のものであったのだ。

だがもし、磯良が正太郎の本質を理解していたとしても、同じことになっただろう。彼女は知らないうちに規範に抑圧されて生きているために、模範的な行動しか取れないからだ。

磯良と正太郎の関係は初めこそうまくいったものの、その後は擦れ違ってしまった。二人はまさに対極に存在する人物同士であり、全く別の「性」を持っているためにそうならざるを得ないのである。御釜祓の凶兆が示すように、夫婦になるべき二人ではなかったのだ。その二人が夫婦になってしまったために、悲劇が生まれるのだといえる。

第二章 袖の死

第一節 磯良の変化

正太郎が袖と播磨にとどまっていたから幾日も経たない内に、袖は生霊に取りつかれて死んでいる。その生霊というのは、磯良のことである。

袖は正太郎の妾として登場し、磯良を苦しめている。その存在は磯良の変貌のきっかけなのだが袖には名前があるだけで、存在感は極めて薄い。袖は正太郎が磯良から逃げのために必要な人物であり、道徳的な磯良からの逃げということで社会規範から外れた存在である「妓女」として設定されたのである。袖は磯良を苦しめた人物ではあるが、

その役割は正太郎の裏切りのきっかけになることで、それ以上の役割——例えば正太郎をめぐる磯良と対立するなどの——はないために、特にその人物像を膨らませる必要はなかったのだ。

この袖の死に対し正太郎はかなりの動揺を見せているが、それが袖に対する深い愛情のためだとはいえない。正太郎が袖と親しくなったのは磯良への不満が大きな理由で、この悲しみも「ふかい心の傷ではなく、たんにそれまでのふたりの楽しい日々が失われ孤独になったことの淋しさに、茫然自失となった子供のような幼なごの表出」(注8)と考える方が自然である。正太郎の感情は解らないでもないが、ここで責められるのは袖の死に対する責任感のなさである。袖の死の原因は正太郎が磯良を裏切り通したことにあると言っても過言ではない。悲しみに浸りきっている正太郎は、袖の喪失を大きなものとして感じているのだろうが、そうであればよりいっそう自責の念に駆られてもよいのだ。悲しみや孤独感に支配され立ち直れない正太郎は、優しい心の持ち主ではあるがそれは彼の弱さでもあり、その弱さは「雄々しさ」の欠如を意味してもいるといえる。

ところで、正太郎を絶望させた袖の死は磯良の生霊がもたらしたものだが、何故袖は死ななければならなかったのだろうか。

磯良は、正太郎が袖のもとから戻らなくなっても模範的な嫁のまま行動している。無意識にだろうが、そうすることで夫が自分から離れていくことはないと思っていたのだろう。それを見事に裏切られた磯良は、彼女の道徳的行為や彼女自身を否定されたような気がしたのではないか。模範的な磯良の全てが否定されたことで、彼女は徐々に、道徳や規範とは関係ない「自我」をあらわにし、変化していく。正太郎を、「ひたすらにうらみ歎きて、遂に重き病に臥」たことも、その表れである。磯良は身体的には衰えていくが、それと反比例するように精神的にはより自由になっていったのである。そして、道徳や規範にとらわれなくなつた磯良の精神が、袖を取り殺すまでの生霊となつたのだ。袖は夫を奪つた女性であるため許せない存在ではあるが、そこに疑問が生じてくる。

裏切られた妻が夫の愛人を殺すのは嫉妬のためと見るのが自然ではあるが、磯良は袖を殺さずにはいられないほど、正太郎を愛していたのだろうか。

先に述べているように、磯良は正太郎に誠心誠意仕えているが、それは「嫁」だからであり、正太郎以外の人物が夫であったとしても、同じように誠実に仕えているだろう。そう考えると、磯良が正太郎に対してそこまで深い愛情を抱いていたとは思えない。彼女が袖を殺さずにはいられない

かったのは、「井沢家の嫁」の立場という理由の方が大きいのではないだろうか。磯良は嫁・妻の鏡であり続けはしたが、袖が現れたことで精神的に追い詰められている。規範にとらわれていた磯良は、袖に対してもこまやかな心配りが出来たが、枷がなくなっている彼女はそういうことをしなくてもかまわないのである。

袖の出現がきっかけとなつて磯良は嫁として苦悩し、極限まで自分を抑えて「嫁の鏡」であり続けた。その結果が正太郎の手酷い裏切りであり、生霊への変化を招いたのである。

これは無論、磯良の中にもともとある、「不慮なること」^{すず}をしだす部分の影響が大きなものとして考えられよう。

第二節 六条御息所と磯良

嫉妬から生霊になつたか否かという点についてももう少し考えたい。

夫の愛人を生霊が殺すという設定は、『源氏物語』の「夕顔」「葵」の段の影響と考えられている。そこで、源氏を愛するあまり生霊になつてしまつた六条御息所と磯良を比べてみることにする。

六条御息所は教養ある美しい女性である。物事を思い詰めたやすく、源氏にとって負担になるほど彼を愛して、

自分の気持ちに思い悩んでいる。自尊心と嫉妬との葛藤から生霊になったのである。また生前は生霊となって葵の上・夕顔を取り殺している六条御息所だが（夕顔についてははっきりしない）、死んでからも紫の上・女三の宮を苦しめている。源氏に対する執着心が、どれだけのものではあつたかがよく解る。

磯良との共通点を挙げるとすれば、教養があつて美しい点と物事を思い詰めやすい点であるが、違ふ点としては、苦しめる対象が夫（光源氏）には及んでいないことだ。これは大きな違いとして考えていいものである。

この違いは、二人の「鬼化^{もののけ}」になるに至つた事情の違いであろう。六条御息所は、源氏を愛するあまりに独占欲が強くなり、葵の上と夕顔を取り殺している。いわば、執着と嫉妬の結果である。もし磯良が六条御息所と同じように嫉妬から生霊となり悪鬼となつたのであれば、その対象は正太郎には向かわずに、袖だけで止まつたのではないか。磯良の場合、正太郎に執着してはいただろうが、それは、六条御息所の源氏に対する執着とは違うものである。嫉妬だけの気持ちならば、正太郎が妾宅から戻らなくなつた時期に、生霊になつていてもおかしくない。磯良は「嫁」である以上執着せざるを得なかつただろうし、生霊になつたのも、正太郎の裏切りを怨みに思う気持ちからだ。こういっ

た事情の違いが、夫まで苦しめるか否かという点に関わつてきたのだろう。

こうして見てみると、六条御息所と磯良は、生霊になり夫の愛人を取り殺したことは共通するがその経緯は一致しているとはいえない。六条御息所はあくまで源氏に対する執着から、磯良は嫁としての苦悩、正太郎の裏切りに対する怨みから愛人を取り殺すことになつたのである。そしてそのために、磯良の怨みの対象はあくまで正太郎だといえるのだ。

第三章 「つらき報ひのほどしらせまいせん」

第一節 死後の解放

^{なみの}草屋で正太郎と再会した磯良（の怨霊）は、怨みの感情を直接正太郎にぶつけている。道徳や規範にとらわれて、模範的な嫁の態度を崩すことのなかつた磯良からは考えられないことである。だが、その行為は生きた磯良が行なつたものではなく、霊になつた磯良が行なつたものだ。死んだことで自分の感情を表出できたことは、体の死とは逆に、精神的には生を得たといえるが、精神的に生を得たといつても、短絡的にこれでよかつたといえるものではない。磯良は死んだことで「自我」を解放することが出来たのだが、この場面以降の磯良は、正太郎に対する怨みの感情がその

行動の根源になっているため、それは「暴発」であるともいえ、解放された「自我」だけが暴走する危険性を持っているのだ。生きていた時に抑えつけられていたものが、その死後に、暴走の危険を孕んで解放されるといふのは皮肉なことであろう。その抑圧されていた感情の爆発が「めづらしくも……」の科白であるといえる。怨霊になって、この科白を直接正太郎にぶつけ、青白くやせ細った手で彼を指差した磯良は、もはや「嫁の鏡」ではなくなったのである。磯良は、この草屋で、初めて内面を全てさらけだして正太郎に対峙しているといえる。

この磯良と対面した正太郎は、磯良の心底の感情のこもった言葉を初めて聞き、また病んだ姿を目にしたことで、ここにいないはずの磯良がいたという以上の驚きと恐怖の思いにとらわれたであろう。その後、彼は物忌みにこもる。夜ごと現れる「鬼化」とは対面していないのだ。この物忌みは陰陽師の教えだが、それをそのまま受け入れてしまったことは彼の「雄々しさ」のなさを表しているともいえる。

その正太郎と対照的なのが、「蛇性の姪」の豊雄である。彼も正太郎と同じように放蕩息子であり、初めのうちは恐れだけを抱き逃げてばかりいるが、その後豊雄は真女兒が妻の富子に乗り移った際、明らかにそれまでとは別の態度

を取っている。真女兒にいろいろな経験をさせられ、また当麻酒人の忠告を受けて人間的に成長したために、「邪神」に對峙しようとする強い態度が取れたのだ。それが「丈夫心」であり、真女兒に立ち向かう決意や、周囲の人々への配慮を促したのである。ここで「丈夫心」を発揮できたことで、豊雄は命を長らえることが出来たのである。この豊雄の例を考えると、結果がどうなったにせよ、正太郎には一度くらい磯良と向かい合う強さが必要だったのでないだろうか。

磯良が四十二日間毎夜訪れたのは、何も正太郎を殺すという理由だけではなかったかもしれないのである。

第二節 「鬼化」磯良の悲劇

磯良は「鬼化」となり、死後も正太郎のもとに現れているが、草屋での「つらき報ひのほどしらせまいらせん」の科白は、正太郎を殺すという意味だけだったのだろうか。

それだけであれば、気を失った正太郎をその場で殺すことも可能だったはずである。だが磯良はそうしてはいない。報復の予告をしただけで姿を消し、その後、四十二日間毎夜訪れるという執拗さをもって、正太郎に恐怖の思いを与えているのだ。

正太郎にとっての磯良はもはや自分の命を奪おうとする

「鬼」でしかない。しかし、磯良にとって正太郎は怨みの対象であると同時に、仕えるべき夫であつた人物なのだ。

死んで道徳や規範から解放された磯良は、模範的な姿で夫に接することはしない。そのかわりに暴発した「自我」だけで正太郎に接しようとしているのである。生前の悲痛なまでの自己抑圧が、こういう歪んだ形で表れたのだといえる。

「鬼化」となり「自我」があらわになつた磯良は、「つらき報ひのほど」を知ってもらいたかつたのではないだろうか。そうであれば、四十二日間執拗に訪れ続けたことも理解出来る。磯良は「無表情に、機械的な正確さと計算をもつて正太郎を追い詰めて」いるのではなくて（注9）、自分があつた裏切りに対してどれほどのショックを受けたのかを正太郎に伝えたかつたのである。

だが正太郎は「鬼」に対し、恐れしか抱いていないために戸や壁にお札を貼り、彼女に対面しなかつたのである。「鬼」を恐れているため、磯良の感情を知ることを受け止めることも出来ないのだ。正太郎がそういう行動を取つたことで、磯良は怨みの思いをますます募らせ、「怒れる声夜ましにすぎまし」という状態になつていたのである。磯良と正太郎の夫婦は、磯良の感情が解放された死後も擦れ違い続けているといえる。

磯良の感情は暴走しているといつてもいいほどなのだが、

その捌け口を得ることが不可能な状態で、唯一その捌け口となり得る正太郎は、物忌みすることで完全に磯良を拒絶し、彼女を人とすら認めていない。磯良は、生前は模範的に生きたことで正太郎に拒絶され、死後「自我」だけになつても拒否されているのだ。これでは正太郎は磯良の存在そのものを認めていないも同然である。磯良は、夫に存在を否定されたことを悲しみかつ怒り、怨みの思いに重ねていつたのだろう。正太郎を殺した時の凄惨さは、怨みだけではなく四十二日間に味わつた感情全てが引き起こした爆発のようなものであろう。

磯良が持つ悲劇は、生前の完璧すぎる自己抑圧に対する死後の感情の暴発という、落差の激しさにある。生前の磯良が少しでも感情に従つて行動していれば、磯良は模範的な妻ではなくなつただろうが、正太郎の振る舞いに対して何らかの行動を取れたであろう。また、死後の感情の表出がああいう暴発の形でなかつたら、「鬼」と呼ばれることも全てを否定されることもなかつたであろう。磯良の生前と死後の落差の激しさは、彼女の悲痛な自己抑圧が招いたものであり、その自己抑圧のために、生前に感情を見ることが出来ず、死後にその反動として、貞淑さを保つことが出来なかつたのである。

おわりに

以上、磯良の持つ悲劇の意味について考えてきた。

生前の、道徳や規範に押し込められている磯良からは、彼女の生は感じられない。むしろ、その死後執拗に正太郎を訪れ続け、自分を拒絶する正太郎に怒って「夜ごとにご家を繞り或は屋の棟に叫」んでいる「鬼」の姿の方に、感情の赴くままに行動するという意味で、人間らしい印象を受ける。「鬼」の怒りのあまりの振る舞いだが、そこには悲しさを見ることも出来るのだ。

磯良が、夫に裏切られた結果として「鬼化」になったことは確かに悲劇である。しかし、生前は道徳、規範に押し込められ「自我」を表出できなかった女性が、死後そういうものにとらわれることのない存在になって、初めて感情を解放させることが出来たという内面の悲劇の方が、より大きなものとして考えられるのだ。「鬼化」磯良を恐怖の対象としてではなく、解放された感情の姿と見ることも可能であろう。そこにこそ、磯良の持つ悲劇の真の意味があるのである。

〈注〉

注1 中村幸彦『日本古典文学大系』解説より。

注2 『正太郎のために金銭を用意したのは』『自分が悪かった』という正太郎の言葉を信じたからであり、

自分の真心が夫を動かすことが出来、贖罪の為に自分の力が必要とされていることを「喜しく」思ってしまったことに他ならないであろう(矢野公和『「うらみ・ます」——「吉備津の釜」私論——共立

女子短期大学文科紀要27 昭59・2)

「夫の愛と結婚生活の幸福を求めて苦悩し、やがて鬼に変貌しなければ終息しない女の性の哀れさが描き出されていることが注目されなければならないであろう」

〔(前略) 夫の浮気に嫉妬し、苦悩し、ついに復讐鬼に変貌して凄惨な報復をせずにはやまない、女性の不思議さ・哀れさ・是非なさを描くことに置かれていたことを見逃すわけにはいかない〕(勝倉壽一『雨月物語構想論』 教育出版センター 昭59・9)

これらの文章を参考にして、一般的に磯良は、献身的に夫に尽くしたが裏切られた悲劇の女性だと考え

られていると考察した。

注3 鵜月洋（中村博保補筆）『雨月物語評釈（日本古典

評釈・全注釈叢書』（角川書店刊 昭44・3）

注4 「性」は『雨月物語』の中でよく用いられていて、

「個人の意志ではどうにもならない先験的な気質」

（長島弘明『雨月物語 男と女の「性」（さが）

国文学40―7）である。個人特有というよりも「男

なら男一般に、女なら女一般に通有の性格へと繋がっ

ていく気質」（同）であり、性格や個性といったも

のではない。一方の「自我」は、その個人そのもの

といえる性格や個性を意味している。

注5 矢野公和 前掲書

注6 正太郎は確かに「奸たる性」であるが、「性」はその

人間全てを表すものではなく、ある一面を示すも

のなので、彼の「奸たる性」と優しさなどの長所は

矛盾しない。

注7 御釜祓は吉備神社に伝わる神事で、吉兆の時は釜が

大きく鳴り、凶兆の時は音がしないといわれている。

磯良と正太郎の幸せを祈って行われたものだが、そ

れに反して釜の音は鳴らなかった。これは神がこの

結婚に警告を与えたものだと思われる。御釜祓の凶

兆は、結婚によって「鬼化」になる磯良と、その磯

良に殺されてしまう正太郎の運命を暗示していたの
である。

注8 元田與一『神と罪の物語―「吉備津の釜」―』（論

究日本文学50 昭62・5）

注9 勝倉壽一 前掲書